

『日本書紀』雄略紀の対新羅関係記事

高 寛 敏

はじめに

雄略紀7年・8年・9年・23年条には対新羅関係記事が著録されているが、内容が説話的で、どこまで史実と考えるかは議論の分かれるところである。しかし、これらの記事が説話的であるとしても、それがなんらかの史実を核としているならば、それはまた古代朝日関係史の貴重な史料となることは言をまたない。それゆえ、該記事についての先行業績も少なくないが、必ずしも意を尽くしているとはいいがたいので、以下に逐次、検討することにした。ここで雄略紀7年・23年条は、いわゆる「吉備氏反乱伝承」の一環をなしているので、この両条を解釈するためには、結局、「吉備氏反乱伝承」全体の検討が必要となる。以下に、この問題からとりあげることにする。

1. 「吉備氏反乱伝承」について

「吉備氏反乱伝承」関係記事は次のとおりである。

〔1〕雄略紀元年(456) 春3月是月条

有吉備上道女稚媛(分注。一本云、吉備窪屋臣女)。生二男。長曰磐城皇子。少曰星川稚宮皇子。

〔2〕雄略紀7年(463) 8月条

官者吉備弓削部虚空、取急帰家。吉備下道臣前津屋(分注。或本云、国造吉備臣山)、留

使虚空。経月不肯聴上京都。天皇遣身毛君大夫召焉。虚空被召来言、(中略。前津屋不敬の内容)。天皇聞是語、遣物部兵士卅人、誅殺前津屋并族七十人。

〔3〕同年是歳条

(ア) 吉備上道臣田狹、侍於殿側、盛称稚媛於朋友曰、(中略。『文選』などを参考にした美人の形容)。天皇、傾耳遙聴、而心悦焉。便欲自求稚媛為女御。拜田狹、為任那国司。俄而、天皇幸稚媛。田狹臣娶稚媛、而生兄君・弟君(分注。別本云、田狹臣婦名毛媛者。葛城襲津彦子、玉田宿祢之女也。天皇聞体貌閑麗、殺夫自幸焉)。田狹既之任所、聞天皇之幸其婦、思欲求援而入新羅。

(イ) 于時、新羅不事中国。天皇詔田狹臣子弟君与吉備海部直赤尾曰、汝宜往罰新羅。

(中略。西漢才伎歆因知利の奏言により、弟君は百濟から今来才伎を連れ帰るが、途中、田狹が弟君に反逆をすすめたので、弟君の妻の樟媛は弟君を殺して忠節を表わした)。

(ウ) 天皇聞弟君不在、遣日鷹吉士堅磐固安錢、使共復命。遂即安置於倭国吾磧広津邑。而病死者衆。由是、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴・鞍部堅貴・画部因斯羅我・錦部定安那錦・詛語卯安那等、遷居于上桃原・下桃原・真神原三所(分注。或本云、吉備臣弟君、還自百濟、獻漢手人部・衣縫部・穴人部)。

〔4〕雄略紀23年(479) 8月条

(ア) 天皇疾弥甚。(中略)。遣詔於大伴室屋

大連与東漢掬直曰、(中略。『隋書』を参考にした文)。大連等、民部広大、充盈於国。皇太子、地居儲君上嗣、仁孝著聞。以其行業、堪成朕志。以此、共治天下、朕雖瞑目、何所復恨(分注。一本云、星川王、腹惡心驚、天下著聞。不幸朕崩之後、当害皇太子。汝等民部甚多。努力相助。勿令悔慢也)。

(イ) 是時、征新羅將軍吉備臣尾代、行至吉備国過家。後所率五百蝦夷等、聞天皇崩、乃相謂之曰、領制吾国天皇既崩。時不可失也。乃相聚結、侵寇傍郡。於是、尾代從家来、会蝦夷於娑婆水門、合戰而射。(中略)、更追至丹波国浦掛水門、盡逼殺之(分注。一本云、追至浦掛、遣人盡殺之)。

[5] 清寧即位前紀雄略 23 年(479) 8 月条

(ア) 大泊瀬天皇崩。吉備稚媛、陰謂幼兒星川皇子曰、欲登天下之位、先取大藏之官。(中略。磐城皇子の諫言)。星川皇子、不聽、輒隨母夫人之意。遂取大藏官。鏤閉外門、式備于難。權勢自由、費用官物。於是、大伴室屋大連、言於東漢掬直曰、大泊瀬天皇之遺詔、今将至矣。宜從遺詔、奉皇太子。乃發軍士圍繞大藏。自外拒閉、縱火燔殺。是時、吉備稚媛・磐城皇子異父兄々君・城丘前来目隨星川皇子、而被燔殺焉。

(イ) 原文省略。星川皇子に事えていた河内三野県主小根が、大伴室屋大連に難波来目邑大井戸田十町を、草香部吉士漢彦に田地を贈り、そのとりなしで許された、という内容。

[6] 清寧即位前紀雄略 23 年(479) 8 月是月条

吉備上道臣等、聞朝作乱、思救其腹所生星川皇子、率船師冊艘、来浮於海。既而聞被燔殺、自海而帰。天皇即遣使、噴讓於上道臣等、而奪其所領山部。

さて、これら一連の記事にはいくつかの分注が付されていて、史料批判の有力な手がかりとなる。今までこの分注に注目して史料批判をすすめた研究には、大橋信弥・湊哲夫・山尾幸久・吉田晶各氏の論考がある⁽¹⁾。それぞれ示唆するところ少なくないが、最も問題となるのは〔2〕の解釈であると思われる。

〔2〕は吉備下道臣前津屋が不敬罪で謀殺された記事であるが、本文「吉備下道臣前津屋」に「或本云、国造吉備臣山」という分注が付されている。大橋氏以下、この分注を原伝とし、大橋氏は〔2〕の原本を吉備弓削部氏家記とみ、湊氏は「朝廷に保存された公的な記録」と推定、山尾氏は〔6〕の、吉備上道臣が所領の山部を没収されたという記事と関連させ、山部連氏家記とする。しかし分注を原伝とするのは速断であろう。なぜなら、分注「或本」の「国造吉備臣」を、本文がなんらかの理由によって、「吉備下道臣」と改変する可能性はあっても、「山」を「前津屋」と改変することは考えられないからである。湊氏は、本文は推古朝の蘇我氏によって改変されたものとするが、やはり「前津屋」のことは解けない。吉田氏は「分注に原伝の形態が残されているといってよい」としながら、本文は吉備氏の「第二の家記」を素材としたとするが、要領をえない。

「前津屋」と「山」の両伝を考えると、〔2〕の原本は二本であったといえるのであって、どちらかが原伝というものではない。このことを看過すると、一連の記事の全体的把握も誤ることになる。

〔2〕の具体的解釈はさておいて、〔3〕の本文について次に考えてみる。

〔3〕(ア)は、吉備上道臣民田狹が任那国司として海外に逐われたうえ、妻の稚媛を天皇にと

(1) 大橋信弥「吉備氏反乱伝承」の史料的研究」(『日本史論叢』3、1973年)。湊哲夫「吉備氏反乱伝承の再検討」(『古代を考える』31、1982年)。山尾幸久「吉備一族の反乱伝承」(同『日本古代王権形成史論』岩波書店、1983年)。吉田晶「吉備氏伝承に関する基礎的考察」(藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店、1983年)

られたので、新羅と通じて反逆したとあるが、分注引用「別本」には、田狹の妻は毛媛となっており、田狹も任那国司になったのではなく、天皇に殺されたことになっていて、本文と著しく異なっている。

さらに〔3〕（イ）では、田狹の次男の弟君が新羅を討ちに派遣されたが、新羅に行かず、百済に行って百済才伎を伴って帰国する途中、田狹が反逆を勧めたので、弟君の妻の樟媛が弟君を殺したことになる。しかし〔3〕（ウ）末尾分注引用「或本」は、弟君が百済の技術者らを伴って帰国したとあるのである。

〔3〕（ア）・（イ）は本文と分注の所伝が異なり、稚媛と毛媛の相異もあるので、原本が二本であったようにもみえる。そしてそのような考えもあり、吉田氏が本文と分注の両方を生かし、稚媛も毛媛も田狹の妻であったとするのは、その例である⁽²⁾。

しかし〔3〕（ア）・（イ）は、田狹と通じた新羅を討つのに、田狹の子の弟君を派遣したこと、弟君は新羅に行かず、百済才伎を伴って帰国しようとしたこと、弟君が樟媛に殺されたことなど、内容が荒唐無稽に過ぎ、分注所伝ともあまりにも距離があり過ぎるので、異伝とはいいがたいと思われる。この話は、〔5〕の稚媛と星川皇子反乱（即ち、吉備上道臣氏の反乱）記事の伏線として造作されたものとみる、大橋・湊・山尾説が正しいと思われる。〔3〕（ア）・（イ）の原本は一本であり、それは「別本」＝「或本」であることになる。原本では田狹は殺されて毛媛を奪われ、弟君は樟媛に殺されたのではなく、百済より技術者を連れ帰ったとあったのである。

本文が造作文であるなら、造作者は誰かということになるが、今までの諸説はこの点が明確

でない。

そのことを考えるにあたっては、まず本文が原本を参考にして造作されたということを明確にする必要がある。つまり、天皇が稚媛を奪ったとあるのは、原本に毛媛を天皇が奪ったとあるのに関係する。弟君が百済に行ったというのもそうである。〔3〕（ウ）（「天皇聞弟君不在」を除く）は、（イ）の「西漢才伎歆因知利」の名とともに、新漢渡来伝承であって、本来は（ア）・（イ）とは無関係な別個の所伝である。それがここに結びつけられたのは、弟君が百済より技術者を連れ帰ったとする原本所伝に関係する。田狹が新羅に通じたなどというのは、弟君と百済の関係を前提にして反逆と新羅を結びつけたのに過ぎない。（ア）・（イ）は原本を参考にした造文なのである。とすると、それを造作したのは『書記』の編者以外には考えられない。

一方、本文完成者（付注者）が原本と異なる本文を造作しながら、原本所伝を付注するという事態も考えがたい。そうすると、本文の骨格を執筆したのは、原本を参考にしながら一応の本文をつくった稿本執筆者なのである。本文完成者は、稿本を基本的に生かしながら、原本による異伝を付注したことになる。ただし、漢籍を用いての文飾は、完成者の手になるものと考えてよい。

ここで「或本」の「吉備臣弟君」に注目する必要がある。原本には「上道」はなかったのである。それを「吉備上道臣田狹」などと、「上道」の二字を加えたのは稿本なのである。とすると、〔1〕本文「吉備上道臣女稚媛」の「上道」も稿本の付会、というより、「一本」の「吉備窪屋臣女」稚媛の「窪屋」を改変したものということができる。田狹も稚媛も上道臣ではなか

(2) 吉田氏と同様な考えは、直木孝次郎「吉備氏と古代国家」(エコール・ト・ロイヤル『古代日本の豪族』学生社、1987年)、門脇禎二『吉備の古代史』(NHKブックス、1992年、86～89ページ)にもみられる。

ったのであるが、稿本はそれを「上道臣」と改変し、さらに〔3〕原本を参考にして、天皇が稚媛を奪ったとし、そして田狹反逆へと話をつないでいて、上道臣反乱譚を完成していったのである。

稚媛は田狹とは無関係の人物である。とすると、〔1〕の「一本」は、〔3〕の原本とは別本であることがわかる。この「一本」は、〔5〕の稚媛・星川皇子反乱記事の原本ともなったと考えられるが、〔2〕とは無関係なのかどうかである。

稿本は〔1〕で「窪屋臣」を「上道臣」と改変して、〔3〕で上道臣反逆譚をつくったのであるから、下道臣反逆譚をも構想したであろうことが、当然予想されてくる。とすると、〔2〕本文「吉備下道臣前津屋」の「下道」は、稿本による付会か、「窪屋」の改変であると考えられてくる。分注所引「或本」の総称的な「国造吉備臣」は、〔1〕分注表記である「吉備窪屋臣」とは異質である反面、〔3〕原本の「吉備臣」とは通ずる。これからすると、〔2〕「或本」とは、〔3〕原本と同本であり、〔2〕「前津屋」の原本は〔1〕「一本」と同本で、それはさらに〔4〕・〔5〕の原本でもあったのである。

田狹・弟君は稚媛とは無関係で、その原本は、国造吉備臣山がなんらかの理由で天皇に殺されたこと、それと関係して吉備臣田狹も殺されたうえ、妻の毛媛を奪われたこと、それにもかかわらず、田狹の子の弟君は百済より技術者を連れ帰り、天皇に献上したことなどを語っていたのである。この原本とは、吉備氏家記ということができる。

稚媛は前津屋と関係するが、その原本を追求するためには、〔4〕・〔5〕へとすすむ必要がある。

〔4〕(ア)は、天皇の長大な遺詔記事である

が、『隋書』などを利用した完成者の文飾を除けば、それは分注所引「一本」と同文ではないが、同意であって、異伝といえるものはない。これは稿本が「一本」を参考にして、新しく文章を構えただけのことであるが、完成者はその表現の相違をも問題視して、「一本」分注を付したのである。この「一本」とはもちろん、〔1〕「一本」と同本である。

〔4〕(イ)の吉備臣尾代記事にも、本文「追至丹波国浦掛水門、盡逼殺之」に、「一本云、追至浦掛、遣人盡殺之」という分注が付されている。本文は「一本」を少し書き変えた稿本の文と判断されるが、本文「丹波国浦掛水門」の原本では「浦掛」であることに注目される。本文「丹波国」は稿本の付会なのである。原本に出る地名は娑婆と浦掛であるが、それは恐らく吉備周辺の地名であって、尾代の在地での武勇譚を伝えたものであろう。それを尾代を「征新羅將軍」などとし、「蝦夷」の反乱記事として舞台を丹波にまで拡大して、天皇臨終記事に結びつけたのは、田狹を新羅に結びつけた稿本であろうと、容易に想像がつく⁽³⁾。尾代は新羅とは無関係なのである。

〔4〕(イ)の原本は、内容からみても、「吉備臣尾代」という人名からみても、吉備氏家記に基づくものであることがわかる。

〔5〕(ア)は、稚媛・星川皇子反乱記事で、〔4〕(ア)の「一本」と同本を原本とする。その「一本」には「星川王」とあるから、「皇子」というのは稿本以下の表現である。また〔5〕(ア)の「磐城皇子異父兄々君」は、稚媛を田狹の妻とした稿本の付会である。

〔5〕(イ)は河内三野県主小根記事であるが、大橋氏の指摘のように、河内三野県主氏と草香部吉士氏との在地での抗争を伝える吉士集団の

(3)大化前代の蝦夷記事が大化以後の知識に基づいたものであることについては、坂本太郎「日本書紀と蝦夷」(『坂本太郎著作集』2、吉川弘文館、1988年)参照。

所伝に基づくもので、一連の記事とは無関係なものであろう。

〔6〕は、吉備上道臣らが星川作乱のことを聞き、船師四〇艘を率いて駆けつけた話であるが、それは原本にあったという保証はない。ただし星川作乱を契機に、天皇が吉備の山部を奪ったということは、確かに原本に基づくと思われる。顕宗紀元年夏4月条に、億計・弘計二王を発見した功績で、来目部小楯に山部連の姓を賜わって山官を拜し、吉備臣を副とし、山守部を以て民としたとあるが、〔6〕は顕宗紀のこの記事を前提にして造作されたと大橋氏は説く。しかし〔6〕は「山部」、顕宗紀は「山守部」とあるから、これは別所伝と考えた方がよいと思われる。ただし「山守部」奪取事件が星川作乱を契機に起こったとは必ずしもいえない。それは前津屋誅殺と一連の事件であったのを、稿本が〔6〕に吉備上道臣氏騒乱記事をつくりながら、ここに結びつけた可能性が強いのである。

「吉備氏反乱伝承」記事は、基本的には二本の原本に基づいている。一本は吉備氏家記であることは既述したが、もう一本は大伴氏家記といえるであろう。大伴氏家記の内容は、天皇が吉備窪屋臣前津屋を殺して山部を奪ったことが契機となり、天皇妃となっていた前津屋女の稚媛が星川を扇動して反乱を起こしたが、天皇臨終の際の遺詔を奉じて、大伴室屋大連が東漢掬直とともに、その反乱を鎮圧した、ということであったと考えられる。

ここで吉備氏家記と大伴氏家記について看過できないのは、前者が「天皇」という言葉を用い、「葛城襲津彦」・「玉田宿祢」の人物名表記も『書紀』の葛城氏関係記事と全く一致すること、後者も「朕崩」・「皇太子」の語を用いていることである。これらの語からすると、この両家記が最終的に完成したのは『書紀』編纂時であって、その完成者は『書紀』修史局であろうと考えられる。つまり『書紀』修史局は、

その第一次作業として、大伴氏・吉備氏家記に手を加え、『書紀』の理念に合わせて文章を整えたのであろう。この点については、さらに後述することにした。

稿本はこの二本を参考にしながら、改めて上道臣氏と下道臣氏の不敬・反乱物語を新たに構成したのであるが、なぜそうする必要があったかである。

その理由のひとつは、大伴氏家記が吉備窪屋臣氏のことを、吉備氏家記が国造吉備臣氏のことを述べていたのであるが、『書紀』編纂の頃には、窪屋臣氏のことは漠然としていて、国造吉備臣氏との関係も不明であったので、吉備氏を代表する上道臣氏と下道臣氏との話として、再構成したと考えられる。

理由のもうひとつは、大伴氏家記が、窪屋臣前津屋の女の稚媛が天皇妃となっていたが、前津屋は天皇に殺されたとしており、吉備氏家記は、国造吉備臣山と吉備臣田狹が天皇に殺され、田狹の妻の毛媛も天皇が奪ったとしていたので、その所伝の類似性から混乱が生じ、改めて上道臣氏と下道臣氏のこととして再構成する必要を感じたからであろう。

以上で、原本の内容と『書紀』本文の完成過程はほぼ明らかになったと思われるが、まだ残された問題もある。

まず、〔2〕に「吉備弓削部虚空」・「身毛君大夫」の人名がみえるが、この二人物は原本にあったかどうかである。不敬罪といい、物部兵士の派遣といい、それは律令的思想の産物であろうから、この二人物も稿本の付会と考えた方が無難であろう。稿本の造作であることが確かな〔3〕(イ)本文の「吉備海部直赤尾」も同様であろう。「虚空」・「身毛君大夫」・「海部直赤尾」などの名は、いかにもユーモアを混えた創作臭があり、これらの人物に基づく立論は、空論のおそれが大きいといわなければならない。

2. 雄略8年(464)是歳条について

雄略8年は歳条の全文を、前半と後半に分けて示すと、次のとおりである。

- 〔1〕(ア)新羅国背誕、苞苴不入、於今八年。而大懼中国之心、脩好於高麗。由是、高麗王、遣精兵一百人守新羅。有頃、高麗軍士一人、取返帰国。時以新羅人為典馬。而願謂之曰、汝国為吾国所破非久矣(分注。一本云、汝国果成吾土非久矣)。其典馬聞之、陽患其腹、退而在後、遂逃入国、説其所語。於是、新羅王乃知高麗偽守。遣使馳告国人曰、人殺家内所養鶏之雄者。国人知意、盡殺国内所有高麗人。惟有遣高麗一人、乘間得脱、逃入其国、皆具為説之。高麗王即發軍兵、屯聚筑足流域(分注。或本云、都久斯岐城)。(イ)遂歌儔興樂。於是、新羅王、夜聞高麗軍四面歌儔、知賊盡入新羅地。
- 〔2〕乃使人於任那王曰、高麗王征伐我国。(ウ)當此之時、若緩旒然。国之危殆、過於累卵。命之脩短、太所不計。伏請救於日本府行軍元帥等。由是、任那王勸膳臣斑鳩・吉備臣小梨・難波吉士赤目子、往救新羅。膳臣等、(エ)未至營止。高麗諸將、未与膳臣等相戰皆怖。膳臣等乃自力勞軍。令軍中、促為攻具、急進攻之。与高麗相守十余日。乃夜鑿險、為地道、悉過輜重、設奇兵。会明、高麗謂膳臣等為遁也。悉軍來追。乃縱奇兵、步騎夾攻、大破之。二国之怨、自此而生(分注。言二国者、高麗新羅也)。(オ)膳臣等謂新羅曰、汝以至弱、當至強。官軍不救、必為所乘。将成人地、殆於此役。自今以後、豈背天朝也。

傍線部分(ア)・(オ)は、新羅を朝貢国・従属国と位置づけたうえでの、『書紀』の潤文とみ

てよい。さらに(イ)は『漢書』、(ウ)・(エ)は『三国志』を用い、新羅・高麗の国名を挿入しただけの、本文完成者の潤文である。

まず〔1〕は、高句麗王が精兵100人を新羅に派遣していたこと、その高句麗兵の1人が新羅典馬に不用意に漏らした一言によって、新羅は自国を併呑しようとする高句麗の真意を悟り、ついに高句麗軍を盡殺したこと、そこで高句麗軍が新たに筑足流域に来襲したことなどを語っているが、それらには「一本」・「或本」引用分注があって、原本が存在したことを示している。

「一本」と本文の関係をみると、本文は「一本」の表現が少し異なるだけで、必ずしも異伝とはいえない。これは稿本が「一本」の文を少し変えただけのことであろう。本文と「或本」との関係は固有名詞に関する異伝であるから、原本が二本であるようにも考えられるが、「或本」の「都久斯岐城」を稿本が当代風に「筑足流域」と表記を変えたともみることできる。他に二本の原本が存在したという徴証もないので、原本は一本で、それは「一本」=「或本」のことと考えておく。

〔1〕は史実を反映しているが、それは、「新羅典馬」のことなど、非常に説話化している。一方、新羅人が高句麗軍を指して「鶏之雄者」などといったとあるのは、これが本来は新羅伝承で⁽⁴⁾、新羅で説話化された後、倭国に伝えられて記録されたことを推測させる。

〔2〕は、新羅王が任那王を介して日本府行軍元帥らに救援を求めたので、膳臣斑鳩ら3人が往って新羅を救ったという内容であるが、「任那王」・「日本府行軍元帥」など、疑問が多い。分注異伝もないので原本が存在したという保証もなく、漢籍による文飾を除けば、膳臣等らの具体的行動も皆無に等しい。〔2〕を史実化する

(4) 末松保和『任那興亡史』吉川弘文館、1949年、86ページ

には、よほどの慎重さが望まれる。

井上秀雄氏は、膳臣らの人名は日本側所伝であるが、「行軍元帥」は新羅で用いられた名称なので、明らかにこの部分は新羅側の史料であると断定した⁽⁵⁾が、果たしてそうなのかである。

井上氏は新羅の「行軍」の例として、文武王紀8年(668)6月21日条にみえる「行軍摠管」をあげるが、この時の唐・新羅軍の高句麗攻撃に際しては、唐将の李勣が遼東道行軍大総管として総指揮官の地位にあったから、新羅の行軍摠管は唐制に従ったものであることが明らかである。李勣は貞観18年(644)・乾封元年(666)にも遼東道行軍大総管として高句麗攻撃を指揮していたが、貞観18年以来、高句麗、百済遠征に参加した指揮者は、一般に某行軍(大)総管の名を帯びていたことは『唐書』をみれば明らかである。実は既に顕慶5年(660)の百済攻撃に際して唐将の蘇定方は神丘道行軍大総管を、新羅の太宗武烈王は嶠夷道行軍総管を拝命していた。この時点で新羅軍は既に唐軍の一部として、唐制に組みこまれていたのである。金庾信伝に「祖武力為新州道行軍摠管」とあって、金庾信の祖父で、真興王代に活躍した金武力が新州道行軍摠管になったとあるが、真興王紀15年秋7月条に「新州軍主金武力」とあり、これが本来の官名である。金庾信伝は庾信玄孫長清作『行録』を原典としているが、長清は後の知識に基づいて官名をいい変えたにすぎない。新羅の「行軍摠管」は、唐軍の一部として編成された新羅軍の武将が、7世紀後半の一時期に名乗ったもので、新羅にはもともとそのような官名はなかったのである。

〔2〕の「行軍元帥」は「行軍総管」と同じで

はないことも無視できない。実は『隋書』高祖紀開皇18年(598)春2月乙巳条に、「以漢王諒為行軍元帥、水陸三十万伐高麗」とあって、「行軍元帥」は隋の高句麗攻撃記事にみえるのである。とすると、〔2〕の「行軍元帥」は、対高句麗戦という一致点から、この『隋書』の文を参考にした、本文完成者の付会ということになるのである。

「行軍元帥」が本文完成者の付会なら、「日本府」・「任那王」も同様であろう。安羅の「日本府」は原本としては「百濟本記」に初めて登場したのであるが、本文完成者はその伏線として近江毛野臣安羅派遣記事を継体紀23年条に造作していた⁽⁶⁾。〔2〕の「日本府」もやはり「百濟本記」の「日本府」の伏線として付会されたのである。「任那王」は、〔2〕と継体紀23年条の近江毛野臣関係記事だけにみえる語であるが、後者は原本の「一本」の誤解に基づくもので、本来は「加羅王」であるべきものである⁽⁷⁾。〔2〕の「任那王」は継体紀の原本、あるいは稿本を参考にし、さらに「日本府」と結びつけて継体・欽明紀の伏線として付会されたものに違いないのである。

〔2〕は本文完成者の造作文を除くと、原本によると思われるのはほとんど皆無である。もともと倭国は一貫して反新羅的であったのであり、新羅救援などとは史実でないことである。〔2〕は、新羅を天皇の従属国とする思想によって、本文完成者が造作したと考えられるが、分注異伝がないこともそれを傍証する。原本と稿本では、筑足流域に來襲した高句麗軍を新羅が撃退したと簡単に記し、そして〔2〕の「二国之怨、自此而生」で結んでいたであろう。と

(5)井上秀雄「いわゆる任那日本府の設置」(同『任那日本府と倭』東出版寧楽社、1978年)。井上説を継承したものには、大山誠一「所謂〈任那日本府〉の成立について(上)」(『古代文化』32-9、1980年)、平野邦男「継体・欽明朝の国際関係」(同『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館、1985年)がある。

(6)拙稿『『日本書紀』継体紀・近江毛野臣朝鮮派遣記事の検討』(『大阪経済法科大学アジア研究所年報』4、1993年)

(7)注(6)、拙稿

ころが本文完成者は、そこに倭臣による救援記事を挿入したので「二国」の意が不明瞭となり、そこで改めて「言二国者、高麗新羅也」などとわざわざ付注したことになる。

問題は膳氏ら3人の人名であるが、この3人も付会であろう。膳氏については、欽明紀6年条に百済に派遣された膳臣巴提便の虎退治の話がみえる。これは膳氏家記に基づくものと思われる、巴提便は実際に百済に派遣されたのであろう。〔2〕の膳臣斑鳩は、巴提便を念頭に、膳氏の系譜上の人物を付会したものと考えられる。吉備臣小梨も吉備氏家記の「吉備臣弟君」や、稿本が「任那日本府」の官人として付会した「吉備臣」⁽⁸⁾をにらんでの本文完成者の付会といえる。

難波吉士赤目子については、少し考えを異にする必要がある。新羅で説話化された〔1〕の内容が倭国に伝えられたのは、591年に新羅で倭典が設置され⁽⁹⁾、曲りなりにも新羅・倭国間に外交関係が樹立された後のことであろうが、それを記録化したのは吉士集団において考えられないからである。もちろん難波吉士赤目子自体は系譜上の人物にすぎないであろうが、この人物がここに登場するのは、この伝承と吉士集団の関係を暗示するものといえるであろう。

さて、〔1〕の事件を『書紀』は464年とするが、大山誠一氏は481年のこととする⁽¹⁰⁾。その論拠は、『三国史記』昭知麻立干紀3年(481)3月条に、

〔3〕高句麗与靺鞨入北辺、取狐鳴等七城、又進軍於弥秩父、我軍百済加耶援兵、分導禦之、賊敗退、追撃破之泥河西、斬首千余級。

とあって、この時に新羅が加耶に援兵を求めたことがわかるが、それが任那王を介して新羅が日本府行軍元帥に救いを求めたという、〔2〕の内容と一致するというのである。新羅が加耶(これは大加羅のことである)に援兵を求めたことと、新羅が日本府行軍元帥らに救いを求めたことを同一視するなど、大山説は最初からかなり強引なのであるが、既述のように、〔2〕はほとんど本文完成者の造作文であるから、大山説には根本から疑問がなげかけられる。しかし481年という年次は、結果的には正しいと考えられる。

別稿で論じたように⁽¹¹⁾、〔3〕は弥秩父(興海)まで侵入した高句麗軍を撃退した内容となっているが、それは実際は広開土王の永楽10年(400)以来、高句麗軍が新羅領内に駐屯し、次第に弥秩父付近まで領土化していったのに対し、新羅がこの時に弥秩父付近から高句麗軍を攻撃し、泥河の西まで駆逐したという記事なのである。〔1〕は〔3〕の発端となった事件で、それは481年、あるいはその直前の480年頃に起こった事件としてよいのである。

〔1〕は、新羅が永年の対高句麗従属関係を断ち切った歴史的イベントの説話的伝承で、吉士集団の記録には明確な年次は記されていないのである。『書紀』がそれを雄略8年条にかけたのは、本文完成者がそれを倭国に関係づけ、「吉備氏反乱伝承」に次ぐ対新羅関係記事とした、最終段階のことと考えられる。

3. 雄略紀9年(465)条について

雄略紀9年3月・夏5月条は長文なので、そ

(8) 拙稿『『日本書紀』所引「百済本記」に関する研究』(在日本朝鮮社会科学研究者協会歴史部会編『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣、1993年)

(9) 武田幸男「六世紀における朝鮮三国の国家体制」(『東アジア世界における日本古代史講座4・朝鮮三国と倭国』学生社、1980年)

(10) 注(5)、大山誠一論文

(11) 拙稿『『三国史記』新羅本紀の国内原典』(『古代文化』近刊号)

の内容を要約して次に記す。

〔1〕3月条。天皇が紀小弓宿祢・蘇我韓子宿祢・大伴談連・小鹿火宿祢らを派遣して、新羅を討とうとした。この時、大伴室屋大連のとりなしで、紀小弓宿祢は吉備上道采女大海を賜わった。新羅と闘った一行のうち、大伴談連と紀岡前来目連、それに談連従人の大伴津麻呂は戦死し、紀小弓宿祢は病にたおれた。

〔2〕夏5月条。父の死を聞いて新羅に行った紀大磐宿祢は、専権を振るおうとしたので、小鹿火宿祢・蘇我韓子宿祢との間に隙が生じた。百濟王がこれを知り、3人を招いた。途中の河で韓子宿祢が大磐宿祢を射たが命中せず、かえって大磐宿祢に射殺された。采女大海は日本に帰り、小弓宿祢の墓所のことで大伴室屋大連に相談したが、室屋の奏上により、天皇は土師連小鳥に命じて、墓を田身輪邑に造らせた。悦んだ大海は室屋に韓奴六口を贈ったが、吉備上道蚊嶋田邑家人部がそれである。また小鹿火宿祢は角国に留まったが、これが角臣の始まりとなった。

〔1〕・〔2〕は長文であるが分注異伝がなく、考察の手がかりに乏しい。しかし、ほとんどが潤文であるが、天皇が新羅を非難した言葉に「投身対馬之外、竄跡匠羅之表」とあるのは注意される。新羅が匠羅（梁山）に進出し、金官国や倭国と対峙したのは、高句麗軍の400年の南進以後、新羅が金官国を併合した532年以前のことと、この言葉はその当時の状態を反映しているからである。梁山については、神功紀5年春3月条に「（葛城襲津彦）詣新羅、次于蹈鞬津、拔草羅城還之。是時俘人等、今桑原・佐摩・高宮・忍海、凡四邑漢人等之始祖也」とあるが、この草羅城も梁山のことである。ここに出る葛城襲津彦は明らかに付会であるが、梁山の古名が雄略紀と神功紀とで表記が異なるのは原本の

相異を意味している。律令時代の忍海郡に属する奈良県新庄町の山口千塚古墳群や笛吹古墳群・寺口忍海古墳群は、鍛冶と関係する朝鮮移住民に関係すると考えられているが、寺口忍海古墳群は5世紀末頃から形成され始めているという⁽¹²⁾。四邑漢人の倭国移住はこの頃であろうが、葛城襲津彦のとったコース、対馬・鉏海水門・蹈鞬津・草羅城は、彼らの移住コースを逆に示したものであろう。鉏・蹈鞬の表記は、鍛冶技術者としての彼らの伝承にふさわしく、神功紀はその伝承をとりこんだものであることがわかる。一般に四邑漢人は葛城氏が連れ帰ったように説かれているが、そうではなく、葛城氏没落の後に倭王権によって葛城地方に安置されたと考えるべきである。四邑漢人の名は『坂上系図所引姓氏録』に、仁徳朝に「拳落随来」した氏々のうちの四村主として、その名がみえているが、それは後に東漢氏支配下に入ったことを反映しているのであろう。

神功紀の例からすると、〔1〕の「匠羅之表」もなんらかの原本に基づいていることを推測させるが、そのような例は他にもある。「新羅王、夜間官軍四面鼓声、知盡得喙地」は、漢籍を用いた潤文であるが、「喙」は『梁書』新羅伝の「啄評」に通じ、それは新羅の王都六部に関係する語である⁽¹³⁾。この「喙」の語も『書紀』の編者の思いつきではなく、やはり原本に出るものと考えられる。

〔1〕には原本があって、その原本には紀小弓らが「匠羅之表」にあった新羅（「喙地」）を攻撃したが、紀小弓は病死し、大伴談連・紀岡前来目連・大伴津麻呂は戦死したと記していたのであろう。「吉備上道采女大海」のことも記されていたと考えられるが、「上道采女」は、7年記事を「下道臣」・「上道臣」のこととした

(12) 奈良県教育委員会『葛城・石光山古墳群』1976年。新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『寺口忍海古墳群』1988年

(13) 武田幸男「新羅六部とその展開」（『朝鮮史研究会論文集』28、1991年）

稿本の添加である可能性が強い。

〔2〕は、紀大磐に関する前半と、紀小弓墓・角臣氏起源に関する後半とで構成されているが、後半は〔1〕の具体的な後日譚であるから、やはり原本が存在したと考えられる。

これに反し、〔2〕前半の紀大磐関係記事には疑問が少なくない。内容が荒唐無稽であるばかりか、前後と必ずしも結びつかないのである。後半は「於是、采女大海、從小弓宿祢喪、到來日本」で始まるが、これは〔1〕の小弓の死と直結する文章であるから、その間に大磐のことが介在する余地はないのである。また、後半の「別小鹿火宿祢、從紀小弓宿祢喪來」とあるが、これによると小鹿火宿祢も小弓の死を契機として帰国したのであり、前半にあるような、大磐・小鹿火の確執事件があったようには思われないのである。

大磐記事は内容からしても、前後のつながりからしても、二次的に強引に組みこまれた可能性が強い。そのことは、顯宗紀3年(487)是歳条の紀生磐記事を検討することによって明らかとなる。

〔3〕紀生磐宿祢、跨捩任那、交通高麗。將西王三韓、整備官府、自称神聖。用任那左魯那奇他甲背等計、殺百濟適莫爾解於尔林。築帶山城、距守東道。斷運粮津、令軍飢困。百濟王大怒、遣領軍古尔解・内頭莫古解等、率衆趣于帶山攻。於是、生磐宿祢、進軍逆擊、膽氣益壯、所向皆破。以一当百。俄而兵盡力竭。知事不濟、自任那歸。由是、百濟国殺佐魯那奇他甲背等三百余人。

〔3〕は、傍線部分だけが「百濟本記」に基づく記事で、その他の部分は潤文である。ここで紀生磐宿祢は「百濟本記」では「為哥岐弥、名有非跛」、「任那」は「伴跛」(大加羅)であった。そしてこの事件は487年のことではなく、

530年代半頃のことで、「百濟本記」の記す内容は次のようなことである。百濟だけでなく、新羅とも対立関係に入った大加耶連盟の盟主大加羅が、529年に倭国に救援を求めたのに応じ、倭国から近江毛野臣の一軍が任那加羅に派遣されたことと関連し、有非跛が相前後して大加羅に派遣されたのであるが、有非跛は大加羅の左魯的那奇他甲背にまきこまれ、反百濟的行動をとったため、百濟によって放逐されたということである。

この「為哥岐弥、名有非跛」を紀生磐宿祢とし、「伴跛」を「任那」と変えながら潤文を加えたのは、本文完成者である。本文完成者は、紀氏系譜の「紀大磐宿祢」を「有非跛」に強引に結びつけたうえで、「紀生磐宿祢」の名を加えたのである⁽¹⁴⁾。ところが、高句麗と通じて百濟に敵対した有非跛の行動は、本文完成者にとって一見奇怪なものであり、そしてなによりも有非跛がなぜ伴跛にいたのかが理解できなかったのである。〔3〕を生磐記事と改変した本文完成者にとっては、この生磐という人物自体と、生磐がなぜ朝鮮にいたかということを説明する必要があったのであるが、その結果が、小弓の死を契機とした大磐の新羅行、あるいは反抗的な大磐の行動として造文されたのである。したがって、大磐記事に蘇我韓子宿祢を登場させたのも本文完成者であろう。蘇我韓子宿祢とは蘇我氏系譜上の人物に過ぎないが、本文完成者が蘇我氏を選んだのは、蘇我氏が紀氏・角氏と同じ武内宿祢後裔氏族で、『書紀』編纂時には蘇我氏が滅亡していたからであろう。

〔1〕・〔2〕の記事から本文完成者の潤文を除けば、残る記事には原本が存在した。その内容は、大伴室屋大連の功績譚と、大伴談連・大伴津麻呂の武勇譚が中心である。紀小弓宿祢のことにしても、室屋の配慮ということが主要

(14) 顯宗3年は歳条の解釈については、注(8)拙稿参照

テーマとなっており、小弓を称揚した「龍驤虎視」以下の文も本文完成者の潤文であって、原文のものではない。〔1〕・〔2〕は基本的には大伴氏家記を原本としていいると考えられる。

〔1〕・〔2〕は一般に大伴氏家記と紀氏家記に基づくと考えられてきたが、やはり紀氏家記も無視することはできない⁽¹⁵⁾。〔1〕で戦死したとある「紀岡前来目連」は、大伴氏家記では「城丘前来目」とされ、しかも星川皇子反乱に連座して誅殺されている。ここに伝承上の混乱があるが、これによって〔1〕の「紀岡前来目連」は紀氏家記に基づいていることが想像されるのであるが、小鹿火宿祢のこともそうと考えられる。〔1〕・〔2〕は大伴氏家記を主要原本とし、紀氏家記を補足原本としていいるといえるであろう。

4. 雄略7年・8年・9年条 対新羅関係記事の年次

雄略8年条の対新羅関係記事は、新羅がその領内から高句麗を駆逐した史実を説話化したもので、その年次は464年ではなく、481年であること、この事件に倭国が関与したとあるのは造作であることについては、既述のとおりである。問題は7年・9年条の原本となった大伴氏家記に年次の記録があったかどうかである。ここで参考になるのは、欽明紀23年(562)8月条の大伴連狭手彦記事である。

〔4〕天皇遣大將軍大伴連狭手彦、領兵数万、伐于高麗。狭手彦乃用百濟計、打破高麗。其王踰牆而逃。狭手彦遂乘勝以入宮、盡得珍宝貶賂・七織帳・鉄屋還来。(分注。旧本云、鉄屋在高麗西高楼上。織帳張于高麗王内寝)。以七織帳、奉獻天皇。以甲二領・金飾刀二口・銅鏤鐘三口・五色幡二竿・美女媛并其從女吾田子、送於蘇我稻目

宿祢大臣。於是、大臣遂納二女、以為妻、居輕曲殿(分注。鉄屋在長安寺。是寺、不知在何国。一本云、十一年、大伴狭手彦連、共百濟国・驅却高麗王陽香於比津留都)。

この記事には「旧本」・「一本」引用分注があるので、原本が存在したことがわかる。本文の完成過程は結論的にいうと、次のようなものであろう。即ち、原本は「一本」で、大伴狭手彦連が百濟国とともに高句麗を攻撃し、高句麗王陽香を比津留都に駆却したという、簡単なものであったと考えられる。稿本は原本を参考にしながらも、高句麗攻撃を狭手彦個人のことでし、さらに数々の戦利品を将来したと内容を敷衍したのである。「旧本」とはその稿本のことであるが、その内容が饒舌であるので、本文完成者はその文の一部を分注に要約し、「鉄屋在高麗西高楼上。織帳張于高麗王内寝」と「鉄屋在長安寺」を付注したのである。この狭手彦武勇譚を記した原本とは、大伴氏家記のことに違いない。これによると、狭手彦が高句麗を駆却したなどというのは信ずるに足らないが、狭手彦が百濟に派遣されたことは事実なのであろう。

ここで注意すべきは、原本に「十一年」の紀年があることである。狭手彦派遣を原本は欽明11年のこととしていたのであるが、稿本が本文完成者がそれを23年に移したことになる。

欽明11年(550)は、斯那奴阿比多が百濟に派遣された年であるが、とすると、狭手彦は阿比多とともに百濟に派遣されたのである。このことは原本の内容自体がそれを傍証している。狭手彦の武勇譚は狭手彦の造作であろうが、狭手彦が百濟とともに高句麗を討ったとあるのは、新羅が百濟から漢城を奪った553年以前でなければ出るはずのない話である。狭手彦は、百濟が漢城をめぐる高句麗を激しく対立して

(15)坂本太郎「纂記と日本書紀」(『坂本太郎著作集』2、前掲)

いた頃に百済に派遣されたので、高句麗を敵とするこのような武勇譚をつくったのである。

狭手彦が阿比多とともに百済に派遣されたことは、次のことによってもわかる。原本は高句麗王を「陽香」としているが、これは欽明 11 年当時の高句麗王・陽原王（陽崗上好王）平成とも、欽明 23 年当時の高句麗王・平原王（平崗上好王）陽成とも異なる。ところが阿比多史料は、百済側からの虚偽の情報によると思われるが、安原王宝延を「香岡上王」としていた。「陽香」の名はこの「香岡上王」からの連想と考えられるのである。要するに、狭手彦は平成・陽成という高句麗王名を知らなかったが、阿比多とともに百済に行ったとき、陽原王前代の安原王の名を「香岡上王」と聞いていた⁽¹⁶⁾ので、陽原王諱をそれから連想して「陽香」と適当につくったということになる。

狭手彦は阿比多とともに百済に行ったとみてよく、詳細な記録を残した阿比多の史料には狭手彦の名があったと考えられる。ただし「狭手彦」という表記は阿比多の記録では考えられないので、それは「沙至比跪」であったと推測される。「沙至比跪」の名が「百済本紀」に採用されなかったのは、「百済記」の編者がこの名を用いて壬午年記事（神功紀六二年条分注引用）を造作したことに関連している。「百済記」の壬午年記事には多くの加羅人名もみえるが、それらはほとんど阿比多史料にあった朝鮮人名を参考にしたものなのである⁽¹⁷⁾。「百済本紀」が採用しなかった「沙至比跪」を「百済記」が利用したのか、「百済記」が「沙至比跪」を利用したために、それを二次的に「百済本紀」から削除したのかは明確でないが、とにかく沙至比跪は阿比多とともに百済に派遣された人物なのである。

欽明 11 年の原本の狭手彦記事を欽明 23 年（壬午年）に移したのは、「十一年」の原本引用分注があることからすると、それは稿本であることが確かである。稿本がなぜそうしたかは確答できないが、稿本編者はなんらかの理由で沙至比跪と狭手彦が同一人物であることを知っていたのではなかろうか。そのようなことがあって、狭手彦記事を「百済記」の沙至比跪記事と同じ壬午年にかけたと思われるのである。沙至比跪記事と狭手彦記事がともに壬午年になっているのは、決して偶然ではないであろう。

狭手彦のことはさておき、重要なことは、大伴氏家記には「（欽明）十一年」という紀年が記入されていたということである。大伴氏家記には『書紀』修史局の手が一時的に加わっていたことは前述したが、欽明紀年はその時のもので、原大伴氏家記の年次は干支表記（大王名が示されていた可能性もある）であったと考えられる。そうすると、原大伴氏家記にあった星川皇子反乱記事と紀小弓・大伴談連の対新羅戦記事にも、干支表記があった可能性は大きい。年次の不明確な前津屋・田狭記事と新羅の高句麗逐出記事は、それを新羅に関係づけた稿本や本文完成者が、紀小弓・大伴談連記事の前に、連年記事として一括したと考えられるのである。

原大伴氏家記に星川皇子反乱年の干支表記があったとすれば、それを雄略末年の 23 年として雄略の死にかけたのは、原大伴氏家記に手を加えた『書紀』修史局の第一次編纂者ということになる。大伴氏家記の雄略遺詔なるものも、この段階での造作文であるということが考えられるであろう。稿本はこの大伴氏家記に基づいて、雄略没年を 479 年としたため、『古事記』雄略没年の乙巳年（489）と相異することになったのではないだろうか。

(16)注(8)、拙稿

(17)拙稿『『日本書紀』所引、「百済記」と「百済新撰」に関する研究』（『朝鮮大学校学報（日文版）』1号、1994年）

以上の検討の結果、雄略7年・8年・9年条の対新羅関係記事のなかで、雄略9年(465)3月条だけが史実をある程度反映していること、そしてその年次にも一定の根拠があることが判明した。その年次をほぼ正確なものとする、『三国史記』の慈悲麻立干紀6年(463)春2月条の次の記事が注目される。

〔5〕倭人侵軼良城、不克而去、王命伐智・徳智、領兵伏候於路、要撃大敗之、王以倭人屢侵疆場、縁辺築二城。

『三国史記』新羅本紀には、照知麻立干紀以前までに倭人侵入記事がしばしばみえるが、それは大部分、新羅の東辺や首都を一時的に急襲した、海賊的集団に関する記事と判断される⁽¹⁸⁾。しかしこの463年記事は、任那加羅に隣接する南方の軼良城(梁山)侵入記事で、それも「倭人屢侵疆場」とあるとおり、一過的な侵入記事でない、これは倭王権の出兵記事と判断される⁽¹⁹⁾。雄略9年の紀小弓らの記事はやはりこれと関係するものであろう。

それでは、460年代前半頃の倭王権の出兵はいかなる理由によるもので、またそれがどうして可能であったかである。その点で注目されるのは、461年に百済の蓋鹵王が弟の昆支を倭に派遣したことである(雄略紀5年条)。

『三国史記』の蓋鹵王紀には、蓋鹵王敗死記事以外にはほとんど記事がなく、昆支派遣のことも著録されていないので、昆支派遣の目的は明確でない。しかし、『魏書』に収録された延興2年(472)の蓋鹵王上表文には、高句麗との関係について「構怨連禍、30余載、財殫力竭、軼自屢敗」と語っているのは、昆支派遣と関連があると思われる。即ち、472年の時点かみて、百済は30余年にわたって高句麗の攻撃を受け、そのため疲弊が極度に達していたので

あり、それは遂に475年の漢城陥落へと進展していったのである。昆支派遣は高句麗との相続く戦争のさなかであったが、その目的がこの対高句麗との抗争に関係することは明らかであろう。

一方、それに先立って、427年の高句麗平壤遷都に対抗し、百済と倭国は婚姻を結び、そして429年に百済の木羅斤資と倭の沙々奴跪らが率いる連合軍が任那加羅で新羅軍を討ったことがあった。新羅の背後には400年の高句麗による任那加羅従拔城占領(『広開土王碑文』永樂10年条)以来、常に高句麗がひかえていた。400年以後、新羅は高句麗に臣属し、その南進政策の一環に組みこまれていたが、429年の任那加羅での戦闘は、この高句麗と新羅の攻勢に反撃を加えたものであろう⁽²⁰⁾。

429年の例からすると、蓋鹵王代の高句麗・百済戦争の激化は、任那加羅付近での高句麗・新羅の攻勢をも意味していたと考えてよい。任那加羅は百済・倭国と一貫して同盟関係にあり、百済と倭国を中継する役割をも果たしていたので、高句麗・新羅の南部戦線は常に任那加羅に向けられていたのであろう。昆支の派遣は、429年の場合と同様に、高句麗・新羅の攻勢に対処するため、任那加羅に倭軍を導入することにあつたと考えてよい。倭国にとっても任那加羅ルートの確保は、国運を左右する問題であつたはずである。460年代前半の倭軍の梁山方面での新羅攻撃は、それが現実化したものといえるのである。

おわりに

本稿は、雄略紀の対新羅関係記事の検討を目的としているが、それに関連する「吉備氏反乱伝承」全体についても言及した。一連の記事に

(18) 拙稿『『三国史記』新羅本紀の倭関係記事』(上田正昭編『古代の日本と東アジア』小学館、1991年)

(19) 鈴木秀夫「朝鮮史料の倭人・倭国」(『東アジアの古代文化』44、1985年)

(20) 注(17)、拙稿

は吉備氏家記・紀氏家記・吉士集団伝承などもと入れられているが、最も重要な原史料となったのは大伴氏家記で、それには干支年が記入されていて、一連の記事の編年の基準になったと推測した。

一連の記事を通じて、倭王権は429年に続いて、460年代前半に出兵し、梁山方面で新羅と闘ったことが判明した。それは前回と同じく、百済・任那加羅・倭国の軍事同盟の発動であり、それは蓋鹵王による昆支の倭国派遣を契機としていた。事実、まだ任那加羅が健在であるこの時期に、任那加羅との同盟をぬきにして、倭軍の梁山攻撃などは考えられないことである。

吉備氏には朝鮮関係記事が少なくない。しかし、欽明紀に「任那日本府」の官人として登場する「吉備臣」は、稿本の添加であり⁽²¹⁾、継

体紀24年秋9月条の「吉備韓子那多利・斯布利」も、「吉備韓子」は付会の可能性が強いとしなければならない。吉備氏の朝鮮関係記事のなかで史料的根拠があるのは、吉備臣弟君が百済より技術者を連れ帰ったという、吉備氏家記の記録だけなのである。

一方、吉備地方には朝鮮移住民出身者の存在が少なくないことが指摘されており⁽²²⁾、特に吉備の中心地である令制の賀陽郡を支配し、吉備一宮の吉備津神社の神職を代々務めた加夜国造⁽²³⁾が、加耶出身と考えられることなど⁽²⁴⁾、古代吉備と朝鮮との関係は密接なものがあつた。これはこれで別に考究すべき重要問題であるが、『書紀』の記事によってその現象を歴史的に意味づける作業は、問題が少なくないといふべきである。

(21)注(8)、拙稿

(22)直木孝次郎「吉備の渡来人と豪族」(藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店、1983年)

(23)藤井駿「加夜国造の系譜と賀陽氏について」(『岡山大学法文学部学術紀要』2、1953年)

(24)西川宏『吉備の国』学生社、1975年、19ページ